

# Old Salt Kossabone 考

—— 魂の航海者 Walt Whitman ——

斎藤 和夫

( On Old Salt Kossabone  
—— Walt Whitman, Seafarer in Soul —— Kazuo Saitoh )

## 1. 作品の概略——序として

本詩は 1888 年 2 月 25 日付 New York *Herald* 紙で始めて公表され、1891-2 年の *Leaves of Grass* 9 版 (death-bed edition) で *Sands at Seventy* の題の下にまとめられた一群の詩のひとつとなっている。W. Whitman の作品としては異色の narrative poem で、彫心の作として採りあげるほどの芸術作品ではないが、かれの最晩年の作であり、かつ自身の祖先について語っている——かれにとって祖先を語ることが自分を語ることになることはすでに *Song of Myself* などでも明らかであろう——ことなどから、Whitman が晩年 (死の 4 年前) に自分の人生と思想について何を思っていたかを探り出すひとつの手掛りとしてここで考究したい。それに先がけて、作品の全容を拙訳を付して提示しておきたい。

### Old Salt Kossabone<sup>(1)</sup>

Far back, related on my mother's side,  
Old Salt Kossabone, I'll tell you how he died:  
(Had been a sailor all his life —was nearly 90—lived with his  
married grandchild Jenny;  
House on a hill, with view of bay at hand, and distant cape, and  
stretch to open sea;)  
The last of afternoons, the evening hours, for many a year his  
regular custom,  
In his great arm chair by the window seated,  
(Sometimes, indeed, through half the day,)  
Watching the coming, going of the vessels, he mutters to himself  
— And now the close of all:  
One struggling outbound brig, one day, baffled for long —  
crosstides and much wrong going,  
At last at nightfall strikes the breeze aright, her whole luck veering,  
And swiftly bending round the cape, the darkness proudly  
entering, cleaving, as he watches,

“ She’s free — she’s on her destination ”—these the last words —  
when Jenny came, he sat there dead,  
Dutch Kossabone, Old Salt, related on my mother’s side, far back.

訳：母かたのはるか祖先

老水夫コッサボーンの死を語ろう。

一生を海で送り、90才にちかく、いまは嫁した孫娘ジェニーの許にいた。

手近には入江、彼方には岬、そして茫漠の海を見晴らす丘の上の家に。  
昼下りから夕方にかけて、窓ぎわの肘掛け椅子に坐っているのが永年の習わしだった。

(時にはまる半日もそうしていた。)

往き来る大小の船を見まもり、何ごとかをぶつぶつ言いながら——でも今はそれも終わったのだが。

ある日、海原を目指す—そのブリッグが、永いあいだ船足を止められていた——逆潮で進路がままならなくて。

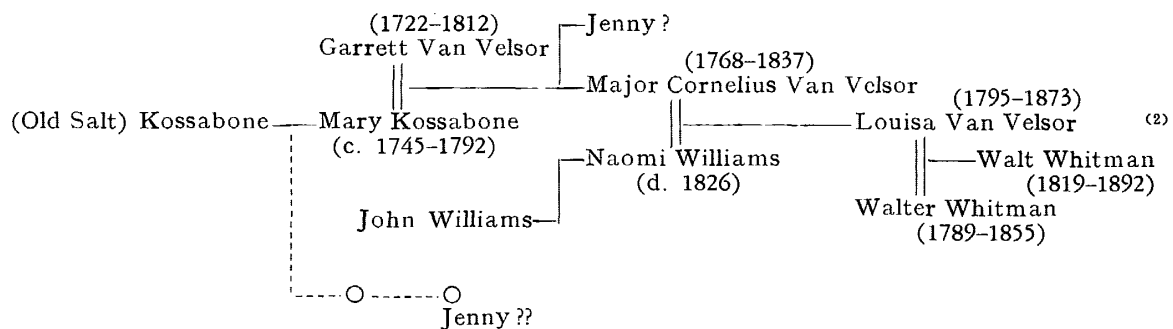
とうとう夜とともに順風がめぐり、運がつきはじめた。

船は船足も軽く岬をかわした、と見守るうちに夜のとぼりがわがとき来たると深まった。

“ 船が自由になった——目的地に向かったぞ—— ” これがかれの最後のことば、ジェニーが来たときすでに坐ったまま生命尽きていた。

オランダ人のコッサボーン、老水夫、母かたの遠い祖先のはなし。

この詩の主人公 Kossabone について Whitman の母方の家系を辿っていくと、次の系図が出来あがる。



詩に現われる孫娘 Jenny が Whitman の祖父 Cornelius Van Velsor の姉妹であるかどうかについては、現在手許の資料では確認できないが、この物語りが Whitman に強い印象を与えたとすれば、母あるいは祖父によって屢々語られたことが推察されるし、そのためには上の系図の当該個所に位置する確率が高いと考えられる。この推定が当たらない場合は、Jenny は祖父 Cornelius の従姉妹となろう。(点線はその場合を仮定した図である。) Old Salt Kossabone の生死年は不明であるが、Mary を 35 才で生んだとすれば生年は 1710 年、従って 90 才で死んだのは 1800 年となる。多分、これを中心とした 10 年内外であろうか。とすると、

Kossabone の死は Whitman が生まれる 2 ないし 30 年まえとなろう。系図では可成り遠い祖先に見えるが、Chronology ではそう遠くないと言える。なお、母方の祖母 Naomi の父（これも船乗り）John Williams は *Song of Myself* の Chant 35<sup>(3)</sup> で歌われている。

Walt の生家のあった West Hills と母かたの祖父母がいた Cold Spring とは直線距離で約 5 キロメートルである。この村は Long Island Sound に面する入江にある港（漁港）であり、Walt がよく遊びに出かけたことがかれの追憶で触れられている。ここで母かたの人々から語り聴かされた物語りのひとつがこの Kossabone の死の様子であったことは疑いの余地がないことであろう。

## 2. Whitman 自身における Kossabone の意義

Kossabone が Walt の晩年に書かれたことの意義は決して単純ではない。この点について *The New Walt Whitman Handbook* の著者 Gay Wilson Allen はつぎのように述べている。

In his last years the poet also feels close to the sea once more, and at times both the sight of the ocean and his reflections almost fan to life the old lyric sparks, as in the group "Fancies at Navesink," or "A sudden memory-flash comes back" in "The Pilot in the Midst." The Ocean revives the emotional symbolism of his greatest poems in "With Husky- Haughty Lips, O Sea":

The tale of cosmic elemental passion,  
Thou tellest to a kindred soul.

But these are merely echoes too, like "Old Salt Kossabone," based on the family tradition about the sailor on his mother's side which he had already used in section 35 of "Song of Myself,"<sup>(4)</sup>

（下線は筆者による）

この評価は重大な点を見落としている。John Williams とは同じ母かたの祖先ではあるが別人でありまた語られていることはまったく違う次元に属することであり、決して echoes であると片づけられない要素を Kossabone が持っている。それは Whitman が殆ど一生のあいだ持ちつづけて来た〈海に対して抱く一種の神秘的な親近感〉を説明する鍵としてのこの詩の意義である。Allen の説くように、たしかに Whitman の晩年の 10 年間は、*Leaves of Grass* 初版刊行後約 15 年間続く〈海の時代〉をうけて、〈第 2 の海の時代〉と言うべきで、一種の revival とも言える。また、echoes に過ぎない詩も見られる。大作も影をひそめている。反面、死を目前にして、(1873 年に中風に襲われたかれにとっては、再発は致命的なことであり、その意味では毎日が生死の関頭にあったといってよい) かれの胸のうちにあるものをすべて吐き出してから死にたいと思ったかのように、形式に拘泥しないで書いたものが多いのである。それは、蝮がアルコールに漬けられて死ぬ間際に、蝮の identity をなす「毒」を一気に吐き出すさまに似ている。この時期にかれが再び〈海の時代〉に入ったことは、いかにかれが海に obsess されていたかを証明するものであり、そしてその obsession の原点を示すものとして Kossabone を考えなければならないのである。(もうひとつの原点は、Long Island での幼少時代に、この島の自然とまったく融合した自然的存在として過ごした幼時体験、なかんずく、大西洋に面する海岸や岬で自己と対面した体験であろう。)

この obsession は言語では規定し尽くせないであろうが、強いて言葉を求めるならば、「海と人間のいのちとの神秘的なかかわり」と言うべきであろう。あるいは「海に対する animistic な心情」とも言うべきであろうか。(Whitman の 作品で海が言及されるとき、必ずといってよいほど「生命」あるいは「死」が allude される点に関しては、東海大学短期大学紀要第 8 号 (1974)<sup>(5)</sup> と札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」9 号の 2<sup>(6)</sup> 所載の拙稿でやや詳しく論じてあるので、付記しておきたい。)

### 3. 人のいのちと海とのかかわり

船乗りは一般に迷信深いといわれる。海はいったん荒れ狂うと人間の力では如何とも為し難い暴力を揮い、人のいのちを危険に陥とし入れるのだから、そこに何かしら超自然的な海の意志を感じ取るのは自然のことであろう。この点を、*Folklore and the Sea* の著者 Horace Beck はつぎのように言っている。

As to the sea, the sailor's attitude toward it is peculiar to say the least. First, the sea is regarded animistically. The real seafaring man genuinely loves the sea. He believes in a kind of spiritual purity in the "being" Sea. .... at times he will try to assuage her malevolence with gifts,<sup>(7)</sup> .....

また北欧の船乗りたちがつぎのことを信じていた、一部では今でも信じられている、とも言っている。

"What the sea wants, the sea will have."<sup>(8)</sup>

だから今でも難船した船の乗組員を海から救い上げると、海は自分を取るべきものを奪われたと怒って、救った人にも復讐するとして、救助作業を嫌う風習があるのだと言う。

船が暴風に遭うか、あるいは帆船のばあい全くの無風にはまり込んで動きがとれないとき、万策尽きた船乗りは「海が人のいのちを要求している。」と感じ、求められている人間が誰であるかを考え、その人を捧げ物にすると海が怒りをやわらげると迷信的に信ずることが考えられよう。その人はまず海が自分の上を渡る資格がないと考える人であることは想像に難くない。まず罪人や借財をもった人や心の汚れた人であったり、傲慢で海を軽視して法螺を吹いた人であったり、日本ではそれらの範ちゅうに女性が含まれることもある。逆に自ら志して海にはいる義人が現われたりする場合もある。

これらを文献で例を挙げるならばつぎの諸例がその極く一部をなすと思われる。

近代の文学作品から：

Joseph Conrad (1857-1924) の *The Nigger of the 'Narcissus'* <sup>(9)</sup> のなかで、この船がアフリカ西岸の沖合いで無風状態にはまり込みまったく動けなくなる。病気の身体でこの船に乗り組んだ James Wait という黒人船員 (the Nigger) はそれまで我儘の限りをつくして来たのだが、この無風 dead calm の状態のなかで刻々と死期が近づき、そしてとうとう死に、水葬にされる。板を傾けて海に死体を落とそうとするがなかなか滑っていかない。Belfast と呼ばれている仲間が「行けよ、Jimmy! 行けよ」と叫び死体に触れると、厭いやながら落ちて行く。船が揺れる (The ship rolled as if relieved of an unfair burden;) 祈りのことばが終った瞬間に、頭上から 'Square the yards!' (帆桁を真横にしろ) と号令がかかる。順風が吹

いて来たのである。やがて帆が一杯の風を受けて船が走り出す。

旧約聖書から：

当然 Jonah 書<sup>(10)</sup> が引用されよう。ヨナは Nineveh へ行けという神の命令に背いて別の方角に向かう船に乗る。

4 But the Lord sent out a great wind into the sea, and there was a mighty tempest in the sea, so that the ship was like to be broken. .... 7 And they said every one to his fellow, Come, and let us cast lots, that we may know for whose cause this evil is upon us. So they cast lots, and the lot fell upon Jonah. .... 11 Then said they unto him, What shall we do unto thee, that the sea may be calm unto us? for the sea wrought, and was tempestuous. 12 And he said unto them, Take me up, and cast me forth into the sea; so shall the sea be calm unto you: for I know that for my sake this great tempest is upon you. 13 Nevertheless the men rowed hard to bring it to the land; but they could not: for the sea wrought, and tempestuous against them. .... 15 So they took up Jonah, and cast him forth into the sea: and the sea ceased from her raging. ....

この物語りから、船乗りのあいだでは、海を渡る資格がない人間が船に乗っているために海が荒れたと思った時には、その人物を目して〈Jonah〉と呼ぶ習慣が生まれた。(ときには、その名が St. Paul とされたり、Foul Weather Jack……これは詩人 Byron の祖父 Commodor John Byron のことである……と変ったりするが。) 現実に、その人物を海に投げ込んだこともあったらしい。現代でも、Jonah と目される人間の乗船を拒絶し、陸地に残すことがある。

日本書紀から：

巻之七、大足彦忍代別の天皇 景行天皇〔27〕

また相模にいでまして、上総に往かむとし、海を望りて高言してのりたましく、「こはわき海ほのみ。立跳ことあげにも渡りつべし」とのりたまひき。海中わたに至りて、暴風ほせたちまちに起り、王船わただよいて渡るべくもあらず。時に王に従へる弟橋媛わたなかと曰ふあらしま妾あり。穂積氏おとたち忍山の宿禰おしやまが女すくねなり。王に啓して曰さく、「今風起り浪なみ泌むすめくして、王船まお沈まおまんとす。こはかならず海神わたつみの心ならむ。願わくば賤妾やつこが身もて、王の命を贖あがないて海に入らむ。」と言いひ訖おえて、瀾なみを押しひらきて入りしかば、暴風止みふねみて、船、岸に著くことを得たり。<sup>(11)</sup>

この物語りの前半について言えば、例の the Flying Dutchman<sup>(12)</sup> の伝説との類似がたちまちに思い出されよう。海は〈ことあげする〉人間が大嫌いなのである。しかしその身代りにいま弟橋媛を得て、やっとおさまったのである。海を往く者にとり、傲慢なことばは禁物である。その信仰が現代でも残って、Silent Navy ということばが存在している。自分の功を誇ることなく、海をないがしろにすることなく、謙虚であることのみ海の心にかなうという思想である。また、この日本書紀の物語りの後半が、本篇の「海といのち」に関連することは言うまでもない。

このような例を背景においてみると、Kossabone の物語りが、いかに神秘性をもって Whitman に語られたかが理解できよう。この話を信じることで自分が Whitman を seafarer の一族に引き込むことにもなるのである。海と人間の生命とのあいだの神秘的なかかわりの証しを自分の祖先に見出した。この幼児体験が、自分の目で海を見、自分の耳で海の音を聴いた幼児体験と Whitman の内面で融合し、かれの作品の至るところで開花するのである。Virginia Woolf のつぎの感懐が思い合わされるのである。〈Books are the flowers or fruit stuck here and there on a tree which has its roots deep down in the earth of our earliest life, our first experiences.〉<sup>(13)</sup>

#### 4. ひとつの開花——*O Captain! My Captain!*

われわれは、Whitman のこの幼時体験から obsession 化した思想——と言うよりも心情——のひとつの開花を、1865 年の作品 *O Captain! My Captain!*<sup>(14)</sup> に見ることができる。この詩は Lincoln の暗殺を悼んで作られたが、the most widely known and least characteristic poem that WW ever published<sup>(15)</sup> と言われるように、Whitman にとっては唯一に近い定型詩で、詩形も rhyme も殆ど完全に伝統的なものに従っている。詩人は、この詩が好評だったことが気に入らなかったと伝えられている。(この詩の好評が、Whitman の他の詩の自由な詩形と rhythm の否定につながることは明白である) この詩はまず 1865 年 11 月 4 日の *New York Saturday Press* に載り、何度か手を加えられたのち、1881 年の *Leaves of Grass* 以降は *Memories of President Lincoln* の title のもとにある 4 篇の詩のうち、著名な *When Lilac Last in the Dooryard Bloom'd.*<sup>(16)</sup> のつぎに位置している。この詩の詩形は視覚的にアメリカ合衆国(この詩が作られた 1865 年には、ほぼ現在のすがたに達していた)の地図に似ているが、意識してそうしたのかどうかは未詳である。相当に人工的な詩形であることは疑いない。

本論に帰って、この詩の内容は無事に目的地に近づいた船——Civil War の危機を乗り切った合衆国を暗示する——の甲板上で血にまみれて死んでいる船長——Lincoln を暗示する——を悼む激しい悲しみを表現している。詩は 3 個の stanza で成り立っているが、どの stanza も内容的にはほぼ同じで、内容的な refrain とも考えられる。最後の stanza を引用しておく。(ただし stanza を追うごとに船が目的地に近づく点は留意すべきである。この stanza は到着し、投錨した時点である)

(The third stanza of) *O Captain! My Captain!*

My Captain does not answer, his lips are pale and still,  
My father does not feel my arm, he has no pulse nor will,  
The ship is anchor'd safe and sound, its voyage closed and done,  
From fearful trip the victor ship comes in with object won:  
Exult O shores, and ring O bells!  
But I with mournful tread,  
Walk the deck my Captain lies,  
Fallen cold and dead.

(註：最後の4行を各2行まとめると、aa bb cc となり、Heptameter の couplets となる。Whitman にしてはまったく例外的な定型詩である。)

訳：わが船長は答えず，唇蒼ざめ動かず，  
父はわが腕を感じることなく，脈膊も意志も失せて，  
船はいますこやかに錨につき，航海は終りぬ。  
恐怖の船路より，勝利の船つとめ果たして帰来ぬ。  
海辺よどよめけ，鐘よ高らかに鳴れ。  
しかしわれ悲しみの足どりもて，  
わが船長の伏したるデッキを歩む。  
命尽きて冷たくたおれたる。

船の航行の自由と安全といのちのかかわりを明示してはいないが，船長が sacrifice となって無事に目的地に着いたことは image づけられよう。ここにも Kossabone の影が見られるのである。Whitman が前述のようにこの詩の好評を喜ばなかったにもかかわらず，手を加えながら，最後まで *Leaves of Grass* から除くことをしなかった理由は，この詩のもつ〈海といのちのかかわり〉の image を捨て去ることができなかったことによるのではないだろうか。

## 5. Kossabone, Lincoln, Whitman

ここまで考えてくると，Kossabone が Whitman の最晩年に書かれた意味が2章で考えられたものに，更にひとつ加わると考えられる。それはつぎのような図式である。

|           |     |                                       |
|-----------|-----|---------------------------------------|
| Kossabone | vs. | a ship                                |
| Lincoln   | vs. | U.S.A. in Civil War                   |
| Whitman   | vs. | U.S.A. in future (American Democracy) |

かなり思い切った presumption である。しかし Whitman の晩年にはアメリカの民主主義が若いころのみずみずしさを失ってきたことを懸念していた節が見られる。1871年に出版した *Democratic Vistas* がよい証左で，このなかでかれは，民主主義が成熟し切らぬうちに，物質的繁栄に幻惑されて，上滑りの形式だけのものになり下がることに対する不安が何度も現われている。またつぎのようにも言っている。

The United States are destined either to surmount the gorgeous history of feudalism, or else prove the most tremendous failure of time.<sup>(17)</sup>

この民主主義に対する危機感をもっとも強く抱いた人たちのひとりとして，これを嵐の海に船出する帆船の image をもち，自らの死が至るときまでにその安全な航海の途につくのを見届けたいという心情を Whitman がもったとしても，事実からそう遠くないと思われる。

Kossabone を歌ったとき，老衰の詩人の胸をかすめた image——自画像——がそのようなものであるとすれば，この詩の意味に多層性が加わるのである。少なくとも Whitman の展望のなかには，つぎのような民主主義の落とし穴があったと思われる。

- (1) 物質的繁栄に目を奪われて、民主主義の精神的側面が軽んぜられ、一種の跛行状態になりはしないか。
- (2) アメリカが物質的に強大となったときに、あとから来る移民に対して差別的になりはしないか。
- (3) アメリカが他の国を犠牲にして伸展する国家的エゴイズムを発揮しないか。
- (4) とくにアメリカの理想と背馳する人種差別が永久に続くのではないか。果たして世界の多くの国から移った多様な民族が最後までアメリカ人というひとつの identity に融合し得るだろうか。

このような不安を背景として書かれたのが *Democratic Vistas* (1871) であり、そして上の不安をもっと率直に語ったのが、Traubel によって記録された語録の至るところに見られるのである。とくに 1888 年と date されているものから 2 ケ所だけ引用して見よう。

(1) Go on, my dear Americans, whip your horses to the utmost — Excitement; money! politics! — open your valves and let her go — going, whirl with the rest — you will soon get under such momentum you can't stop if you would. Only make provision betimes, old States and new States, for several thousand insane asylums. You are in a fair way to create a nation of lunatics.<sup>(18)</sup>

April 10, 1888

(2) While I seem to love America, and wish to see America prosperous, I don't seem able to bring myself to love America, to desire American prosperity, at the expense of some other nation or even of all other nations.<sup>(19)</sup>

April 1, 1888

この 2 文を読むだけでも、Whitman がアメリカ民主主義の前途に絶望に近い不安を感じていたことが明白である。とすれば democracy を船に見立て、それを見守る Kossabone に自分を見たてようとする心理、〈自分のいのちが民主主義という船の安全を購う犠牲となれたら〉という願望を、この詩から窺うことは、あながち無理とはいえないだろう。

このことについて、さらに傍証を得る方法は、Kossabone の manuscript を Whitman から贈られた女優 Ellen Terry なるひとを迎えることであるだろう。日記でも残されていることが望ましいが。

## 6. 海への回帰——魂の航海への再出発

2 章において、Whitman の晩年を〈第 2 の海の時代〉と呼んだが、〈第 1 の海の時代〉と対比するとき、後者が Whitman の思想がよって来たところについての自己告白が多いのに対し、前者は〈海への回帰〉を自分の死と結びつけているものが多く見られる。これは決して晩年の思想ではなく、幼児の時代から抱きつづけてきた思想——もはや *à priori* にちかい——が死の接近とともに現実感がましてきたにすぎない。1888 年 *November Boughs* に付された *Sands at Seventy*<sup>(20)</sup> と題された一群の詩と、1885 年 *Fancies at Navesink*<sup>(21)</sup> の title に集められた 8 篇の詩の、ほとんどが Whitman の sea memories に負うており、とくに前者の



冒頭の3篇<sup>(註)</sup> はかれの魂のふるさとである Paumanok (Long Island の Indian Name) の讃歌であり、そこにすでに心が帰り着いている感を与えている。註: *Mannahatta, Paumanok, From Montauk Point.*<sup>(22)</sup>

自らの死を〈海への回帰〉と感ずるひとは海辺での幼時体験に負うことが多い。この思想は幼時に海辺に住んだ者、生涯を海上に送った者などの特権である。しかしその特権は、海を永劫回帰の世界と観ずる人間にも分かち与えられる。後者の典型は Nietzsche であろう。Thus Spoke Zarathustra のつぎのことばひとつで足りよう。

Behold what fullness there is about us! And out of such overflow it is beautiful to look out upon distant seas. Once one said God when one looked upon distant seas; but now I have taught to say: overman.<sup>(23)</sup>

(我等の身边に如何なる豊満のあるかを見よ。而して横溢の間より、遙かなる大海を眺望するは美し。人びと遙かなる大海を眺めしとき、かつて神を言へりき。されど今我は汝等に、超人を言うことを教えたり。——生田長江訳)

前者の典型は、すでに本稿の引用に現われた Joseph Conrad, Virginia Woolf などのほか、Paul Valéry に現われよう。あれほどに洗練された知性を分析に傾けた思想家が、ひとたび故郷の地中海岸 Cette の港町の海辺の墓地に立ったとき、

La mer, la mer, toujours recommencée!<sup>(24)</sup>

(海や海、さなり海なり、とこしえに繰り返しつつ!)

と歌い、やがてその海辺の墓地に葬られ、そしてその墓石には、

O recompense apres une pensee

Qu'un long regard sur le calme des dieux!<sup>(24)</sup>

(神々の<sup>しづけさ</sup>静寂ながく今<sup>まも</sup>しわが目守りいたれば、ひとすじの思索のはての、<sup>うま</sup>おいかに<sup>なく</sup>美し報いや!)(訳は井沢義雄: ヴァレリイ詩集による)

の2行(さきに引用した1行の直後の2行)が彫りつけられ、海辺に回帰したのである。かれの生涯の作品のなかに Cette における幼児時代がいかに影を落としていることか。そしてそれがヨーロッパの苦悩のなかにあってかれをいかに虚無から救い出したことか。

本題に立ち帰って、Whitman の思想のなかで、死はその生が海に回帰ことであるとする、死後の旅路は海に向かって始められなければならない。その証しがつぎの詩であり、それはかれの死の前年の作品である。

*Sail Out for Good, Eidólon Yacht!*

Heave the anchor short!

Raise main-sail and jib — steer forth,

O little white-hull'd sloop, now speed on really deep waters,

(I will not call it our concluding voyage,

But outset and sure entrance to the truest, best, maturest;)

Depart, depart from solid earth — no more returning to these shores,

Now on for aye our infinite free venture wending,  
Spurning all yet tried ports, seas, hawsers, densities, gravitation,  
Sail out for good, eidólon yacht of me!<sup>(25)</sup>

訳：錨を巻きあげろ／メインスルとジブを張れ——前方に舵をとれ／おおこの白い船体のスループよ、いまこそ 真の深い海原に急げ／（この船出を最後の船路と呼ぶまい／もっとも真にして善にして成熟せるものへのたしかな船出なのだ／この固い大地から去っていこう——もはこの岸辺に帰り着くことなく／いまや永久に限りない自由の船路を進もう／すでに見た港や海やつなぎ索や雑踏や重石をすべて尻目に掛けて／永久に船出せよ、わが魂の幻のヨットよ。

この詩に歌われた内容は明らかに Whitman の swan song である。すでにこの思想は 1871 年版の *Leaves of Grass* に現われた、*Passage to India*,<sup>(26)</sup> *Joy, Shipmate, Joy!*<sup>(27)</sup> *Now Finalè to the Shore*.<sup>(28)</sup> の中心思想であり、その繰り返しに過ぎぬと思われるが、死の前の作品でもあり、やや沈んだ調べを持っている点においては、20 年前とは違って現実感を伴った辞世と言えよう。その証左に、その前年まで (1890) は、*Now Finalè to the Shore* が 20 年にわたって 辞世として用意してあったものが、91 年に入ってからこの詩に代った節が見られ、いよいよ死を目前にして、覚悟を新たにすることが想像されるのである。<sup>(29)</sup>

## 7. お わ り に

Whitman の海に対する言及は、正面からテーマにしたものから比喩として用いられたものに至るまで、無数といってよい。そして Whitman 自身つぎのように語っている。

Once, at the latter place<sup>(註)</sup>, (by the old lighthouse, nothing but sea-tossings in sight in every direction as far as the eye could reach,) I remember well, I felt that I must one day write a book expressing this liquid, mystic theme.<sup>(30)</sup>

(註) Montauk Point を指す。

この望みを抱かせた原点のひとつに Kossabone の物語りがあったとするならば、*Old Salt Kossabone* は詩人の生前にぜひ告白しておきたいことであつたと思うし、その意義も十分に認められるのである。

昭和 51 年 5 月脱稿

## REFERENCES

- (1) Walt Whitman, *Leaves of Grass, A Comprehensive Reader's Edition*, ed. Harold W. Blodget et al, (New York: New York UP, 1965) p. 522. 以下 *Leaves of Grass* はすべてこの版に拠る。
- (2) *ibid.* fn.
- (3) *ibid.* pp. 69-71 (Including Chant 36).
- (4) Gay Wilson Allen, *The New Walt Whitman Handbook*, (New York: New York UP, 1975) p. 156.

- (5) Kazuo Saith, *Walt Whitman—His Thought on the Sea and Life and Death—*東海大学短期大学紀要, 1974.
- (6) 斎藤和夫, Walt Whitman の詠唱詩——その思想性と音楽性——札幌大学外国語学部「文化と言語」1976.
- (7) Horace Beck, *Folklore and the Sea*, (Middletown: Wesleyan UP, 1973) p. 300.
- (8) *ibid.*
- (9) Joseph Conrad, *The Nigger of the 'Narcissus'*, (Harmonds worth, England: Penguin Books, © 1897) pp. 116-134.
- (10) *The Book of Jonah in Old Testament*, King James Version, (New York: American Bible Society, 1816) pp. 823-824. なお、聖書の現代語版は引用文として採り難い.
- (11) 日本書紀, 卷之七, 大足彦忍代別の天皇, 景行天皇, 日本古典全書 (東京: 朝日新聞社, 1974) p. 166.
- (12) *Folklore and the Sea*, p. 302.
- (13) Virginia Woolf, Author's Introduction to *Mrs. Dalloway*, (Tokyo: Kenkyusha, 1967) xlv.
- (14) *Leaves of Grass*, pp. 337-338.
- (15) *ibid.*, p. 336 fn.
- (16) *ibid.*, pp. 328-337.
- (17) Walt Whitman, *Prose Works 1892*, Vol. 2, ed. Floyd Stovall, (New York: New York UP, 1964) p. 363.
- (18) Walter Teller, *Walt Whitman's Camden Conversations*, (New Brunswick: Rutgers UP, 1973) p. 31.
- (19) *ibid.*, p. 32.
- (20) *Leaves of Grass*, pp. 507-536.
- (21) *ibid.*, pp. 513-516.
- (22) *ibid.*, pp. 513-514.
- (23) Friedrich Wilhelm Nietzsche, *Thus Spoke Zarathustra* (Eng.), tra. Walter Kaufmann, (New York: Viking Press, © 1966) p. 85. 本書に現われる永遠回帰の思想は北西イタリア海岸の Rapallo の入江ではるかに海を見渡しながら形成されたものである. (*Ecce Homo* 参照).
- (24) Paul Valery, *Le Cimetiere Marin*, 1st stanza, (France: Editions Gallimard, 1960) p. 147.
- (25) *Leaves of Grass*, p. 539.
- (26) *ibid.*, pp. 411-421.
- (27) *ibid.*, pp. 501-502.
- (28) *ibid.*, pp. 502-503.
- (29) Walt Whitman, *A Death-Bouquet*, *Prose Works 1892*, Vol. 2, pp. 671-673.
- (30) Walt Whitman, *Seashore Fancies in Specimen Days*, *Prose Works 1892*, Vol. 1, (New York: New York UP, 1963) p. 139.